

# 忘れられない 風景

FM北海道

中田 美知子



14年前、開局10周年企画として私は世界に出て、たったひとりで取材をした。北海道新聞、北海道文化放送、道新スポーツ、FM北海道とグループ4社それぞれの周年が重なった年、北海道の緯度と同じ北緯43度にある国を訪ね、地球を輪切りにしてみようという企画があった。「N43」と名づけられたその企画は新聞社とTV局は取材記者とカメラマンがランドクルーザーに乗りナホトカから天山山脈を越えトルコのイスタンブールまで旅する壮大な企画だった。当時の上司がある日私に

こう言った。「世界を旅しないか？行くのはひとりだけ。1年に4回取材に行き1時間の番組を10本作れ。取材場所も対象も自由、企画も自分でたててくれ。道新とUHBはアジアだけで3ヶ月取材をする。でもうちの会社で長期間留守にしたらキミの席がなくなる。『N43』と他社とタイトルは同じだが中田君は単独行動だ」

元来私は仕事を断らない。というより性格として断れない。仕事と同じ日の同じ時間に重なってしまうとか、よほど物理的に無理な条件が出てこ



モンゴルの草原にて



モンゴル、草原の牛

ない限り、受ける。そして何で引き受けたのか後悔する。この海外取材の時も、3人の子供は未成年だったし旅行経験が豊富なわけでもなんでもなかった。でも心惹かれた。見たことのない世界を取材で、目的を持って、しかも自分の懐もあまり痛まずに旅できるなんて最高だった。子供は船橋に住む母の許に預けることにした。

こんな時でなければ行かないところへと、企画したのがモンゴルの首都ウランバートルである。正確には北緯45度なのだが、件の上司にお伺いを立てたら許可が出た。

しかも旅好きでカメラが趣味という神田エリという友人がモンゴルなら行きたいと同行することになった。旅は道連れ、心細さもふっとんだ。

1991年 夏

ウランバートル

草原の巨大なネズミ

バスのような大型車に乗ったら運転手の趣味なのかアバのダンシングクイーンが流れてきた。70年代に世界で大ヒットした曲を広大な景色を見ながら聞くと、やけに懐かしい気がした。モンゴルの平原に住むげっし目のタルバガンはプレーリー

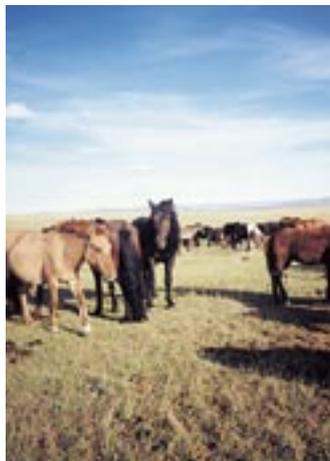
ドッグの一種で、あちこちで見られるというので予め運転手さんに見せてほしいと頼んでいた。

彼が車を止め、開けたガラス窓から白いタオルをぐるぐる回す。何やら大声で私達に向かって叫び遠くを指差している。タルバガンを遠くで見つけたらしい。タルバガンは用心深い動物で、地面にあけた穴から少しだけ顔を出す。でも好奇心も強いので、遠くに見える白いひらひらしたものを見掛けひょいと身体を立てる。そこを猟銃でびゅんと撃たれてしまい人間様の食卓にのるわけだ。ちなみにモンゴルでネズミを食わされたと激怒した日本人がいたが、それはタルバガンで彼らにとって、もてなしの「ご馳走」なのである。

結局運転手さんの指し示す彼方にははずのタルバガンは私にもエリにも見えなかった。モンゴル人は目が良いのだと近視が多い日本人が言えば笑い話だが、見えていても判別することができなかつただけかもしれない。

ウランバートル郊外に行く途中では、道の真ん中を悠然とけむくじゃらの巨大な牛のような動物が横切っていた。ヤクだそうだ。

道路を走っていて意外な動物に出会う。これもまた道の楽しみのひとつである。



モンゴル、草原の馬  
中央はアツラグと呼ばれる父馬

1991年 秋  
イスタンブール  
黄昏のエザン

モンローウォークを歌った南佳孝さんは、新聞とテレビのクルーと一緒にレポーターとしてこの旅に参加していた。3ヶ月の北緯43度の国々を回りトルコのイスタンブールのレコーディングスタジオで曲を録音した。「風の旅人」というその曲を聞くといろんな思い出が湧き上がって来る。夕暮れのボスフォラス海峡、ガラタ橋で魚を売るダミ声のおじさんたち、ハمامと呼ばれるトルコ式の風呂、グレーがかかった色合いの美しいブルーモスク、雑然とした景色の中に響く黄昏のエザン。かつては人の肉声で塔の上からアッラーの神への祈りの時間を知らせたと言うが、今では録音したテープを使っている。時間を秒単位で合わせようなんて考えは彼の国にはないので、だいたいの時間に合わせエザンが街に流れる。少しずつ時間がずれるものだからあちこちでエコーがかかったように聞こえるその音を録音してきた。夜ひとり、部屋で聞くと幻惑される。まじないの声のようだ。そう言えば愛知万博にはトルコのレストランがある。トルコと言えばケバブくらいしか知らない方には鯖サンドをお勧めしよう。刻んだ玉葱と、揚

げた鯖を硬いパンに挟んで塩をつけて食べるそっけない食べ物なのに私は好きだ。初めて食べた時から日本人には懐かしい味がした。

道を通る時に聞こえてくる音は五感を刺激する。生活音も、自然界の音も、人工的な音も記憶を蘇らせる縁となる。

2000年 夏  
ハワイ島  
コナの夕陽

仕事では20カ国ほど旅したが、プライベートで家族と何回も旅した海外はハワイくらいかもしれない。私もかつてはご多分に漏れずハワイを初めは馬鹿にしていた。幟を持った添乗員氏がぞろぞろ日本人を引き連れて行列する街くらいしか想像していなかった。ところがオアフ島に行った時からその魅力にはまった。ハワイの魅力は個性豊かな島を旅するとき倍増する。映画ジュラシックパークのロケも行われた原始時代のような風景が広がるカウアイ島もいいが、黒い溶岩台地が広がるハワイ島をコンバーチブルで一周した時の楽しさは忘れられない。既に社会人になっていた娘二人を連れてビッグ・アイランドと呼ばれるハワイ島をレンタカーで回る。周囲の道路はおよそ350



イスタンブール ガラタ橋の鯖売り



イスタンブール 霞むブルーモスク

キロ、朝早く北東のヒルトン・ワイコロアを出て東部のヒロにある小さな市場を覗くと小さなマンゴーがいっぱい売られていた。いくらか聞いたなら「ワンダラー」と無愛想な顔をしておばちゃんが答えた。2個だけ買って車に乗ったが、木で熟したらしいマンゴーはホテルに帰って食べたらうっとりするくらいの甘さで、何故沢山買わなかったのかと悔やんだ。

キラウエア火山を回り赤い溶岩がちろちろと蛇のように見えると期待してチェーン・オブ・ザ・クレーターズ・ロードを南下した。でもどこを見ても黒い巨大なカリフラワーのような冷めた溶岩ばかりで、ここから先は危険で足元の岩を踏み抜かないようにしろという警告が出て、また来た道を引き返した。どこへ行けば赤い溶岩が見えるのか地元の人に聞けばよかったのかもしれないが、マンゴーのおばちゃんの、笑顔とは無縁な怖い顔を思い出すと気が退けた。赤い溶岩をあきらめて、夕方コナに着いたあたりで車を止め、ホロを揚げオープンカーにして眼前に広がる水平線に沈む夕陽を見た。あんなに空が真っ赤に染まったのを見たことがない

公共の交通機関がハワイ島にはない。だからレンタカーは欠かせない。やはり道の魅力はドライブなのだ。



ハワイ島コナの空港でレンタカーを借りる

## 2005年 5月 東オホーツク メルヘンの丘

2年ぶりに東京勤務から呼び戻され、北海道に帰ってきた。早速東オホーツクのシーニックバイウエイのシンポジウムに声をかけて頂いた。アメリカで提唱されたこの運動は今や「道の景観」という直接的な意味から発展しライフスタイルや地域運動になりつつある。女満別空港に向かう途中メルヘンの丘を教えてもらった。遠くの木々を見ながらなんとなくわかった気がした。観光客として海外旅行で感じた魅力を思い出してみると、それは景色だけではなく、音や、香りや、ドライブそのものの楽しみや、動物との出会いが彩りを添えてくれたのだ。北海道にもドライブに適した道があり、動物との出会いや、音や、季節の味覚がある。幸せなことに私達は「忘れられない風景」の真っ只中に暮らしている。

中田美知子 (なかた みちこ)

Profile

出身地/東京。現FM北海道 営業本部副本部長。



メルヘンの丘 撮影：山本勝栄